

ポジティブフィードバックを核とした 児童の自己肯定感を高める実践研究

— 学級から学校全体への広がりを目指して —

学籍番号 249112

氏 名 笹谷 直弘

主指導教員 森田 英嗣

副指導教員 大継 章嘉

1. 実践研究の背景と目的

実習校の児童は市内でも学力・生活水準が高い地域に属し、親の要求も高い。どれだけ頑張っても褒めてもらえず、テストでよい点を取っても認めてもらえないことから、自己肯定感が低いという特徴がある。また、ストレスが高く、そのイライラを学校で発散しトラブルに繋がるケースも多く、これも実習校特有の課題といえる。小学校学力経年調査の質問紙でも、全学年で自己肯定感に関する項目の肯定的回答が他の項目に比べて少ない結果が見られた。こうした状況を踏まえ、生活指導部長として、自己肯定感を高める必要があると考え、ポジティブフィードバックに着目した。実習校の教育目標には「認め合い、支え合う学級集団づくりに努める」と掲げられており、学級経営の中で肯定的な関わりを積み重ねることで、児童が頑張れば認めてもらえ、自分の居場所があると思える学級づくりを学校全体で進めることが重要だと捉えた。本研究では、教師が日常的に行うポジティブフィードバックが児童の自己肯定感にどのような変容をもたらすのかを検証し、その実践を学校全体に広げる仕組みを構築することを目的とする。

2. 実践研究の内容

2. 1 実践研究Ⅰ（基本学校実習）

基本学校実習では、筆者の学級においてポジティブフィードバックの効果を検証した。ピア・サポートの「プラスのストローク」や、児童同士が互いの良さを伝え合う「ほめ友」を継続的行った結果、児童の褒め言葉は抽象的な表現から具体的な表現へと変化していき、発表数も増加した。また、困り感の強かった児童においては、暴言の減少や活動への参加の安定、友だちとの関係改善などの変容が見られた。これらの実践を「児童理解」や「生活指導ワーキング」で共有したことで、教員の関心が高まり、翌年度の協力者募集へと繋がった。

「生活指導ワーキング」とは、課題に対して改善策を気軽に相談できる場として、放課後に自由参加の形で困りごとの共有や実践紹介を行うために筆者が立ち上げたものである。

2. 2 実践研究Ⅱ（発展課題実習）

発展課題実習では、協力教員6名とともに学校全体でポジティブフィードバックの実践を行った。授業録画を用いて言語賞賛の回数や言葉掛けを可視化した。「生活指導ワーキング」では、図1のような「取り組みの報告」「知る」「課題の確認」「試す」というサイクルを回しながら実践を深めた。録画データからは、どの教員も月を追うごとにポジティブフィードバックの回数が増加し、1学期には10回前後だった回数が、2学期には20回前後の褒め言葉がフィードバックされていた。国語や社会など褒めにくいとされる教科でも、思考過程や努力を認める言葉掛けが行われ、目立たない児童への声かけの工夫も共有された。また、授業録画からまとめた「褒め言葉集」を共有することで、褒め方のレパートリーが増え、実践の幅が広がった。児童の自己肯定感アンケートでは、「自分に満足している」「良いところがあると思う」「価値ある存在だと思う」「これからいろいろできると思う」といった項目で肯定的回答率が上昇した。一方、「役に立っていないと感じる」「友だちと同じくらいできると思う」といった項目は低く、他者比較や自己有用感に関する項目に関しては課題が残った。

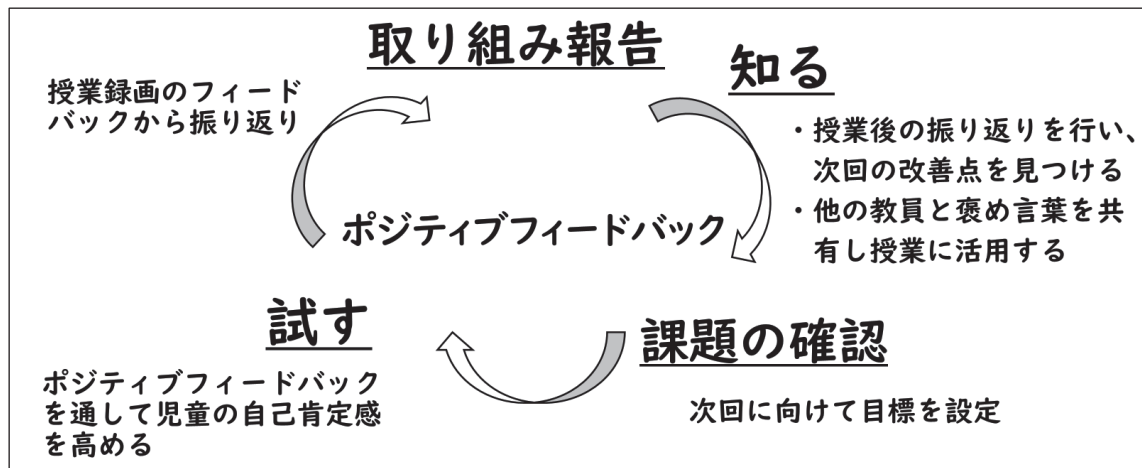


図1 「生活指導ワーキング」におけるポジティブフィードバックの検討サイクル

3. 考察

本研究の結果、ポジティブフィードバックの継続的な実践は児童の自己肯定感の高まりに寄与する可能性が示唆された。具体的な行動を認める言葉掛けを積み重ねることで、児童は自分の努力や存在を肯定的に捉えられるようになり、挑戦への意欲や安心感が高まったと考えられる。また、目立たない児童への声かけを意識的に行ったことで、一人ひとりが認められる機会が増え、学級全体の心理的安全性が向上したと考えられる。

さらに、ポジティブフィードバックの実践は教師の指導スタイルにも変容をもたらした。インタビューでは、「怒らなくなった」「感謝・尊敬・応援を意識するようになった」といった振り返りが見られ、児童への関わり方が共感的で前向きなものへと変化していた。褒める実践が教師自身の精神的安定にも影響し、感情の自己調整を促した可能性が示唆された。

また、「生活指導ワーキング」は、教員同士が悩みを共有し、改善策を協働的に考える場として機能し、学校全体でポジティブフィードバックを継続するための基盤となった。今後の課題としては、目立たない児童への働きかけの継続、具体的な行動を捉えたフィードバックの質の向上、学校全体で取り組みを定着させる仕組みづくりが挙げられる。